

2P-74 瀉下薬エイジツの発生経緯を考える（その1）

（帝京大薬） 木下 武司

【目的】生薬エイジツは薬局方ではバラ科ノイバラの偽果を基原とし、瀉下を目的とする家伝薬に配合されるほか、漢方でも本朝経験方として營實湯（浅田宗伯『勿誤薬室方函』に収録）があり、これももっぱら瀉法の薬方として知られる。營實は『神農本草經』以来の歴代中国本草に必ず収載される品目であるが、中国には瀉下薬という認識はどこにも見当たらず、日本で派生した用法とあってよい。本研究は營實がどのような経緯で瀉下薬として用いられるようになったか各種典籍の考証を通して明らかにすることを目的とする。

【方法】『外臺秘要』ほか中国の各時代を代表する医書について、營實あるいは牆薇（または墻薇、薔薇、薔藤）の名で配合する処方抜き出し、その中に瀉下の目的で用いるものがあるかどうか調べる。また、同様に平安時代から江戸期に至る和籍医書を参照して、營實・薔藤を瀉下薬として用いるのがいつの時代までさかのぼるのか調べる。

【結果・考察】中国の医書で營實を配合する処方は『外臺秘要』に1方、『太平聖恵方』に3方、『聖濟總録』に2方、『普濟方』に4方あるのみで、その他の医書には見当たらず、その多くは營實根とあった。『太平聖恵方』の2方に単に營實とあるが、その用法は瀉下とは無関係であり、果実ではない可能性が高い。したがって、中国の營實は根を薬用とするものであり、果実ではないことがわかった。『神農本草經』では部位の記述はないが、『名醫別録』では実ではなく根とされている。『本草經集注』では營實を牆薇の果実と注釈しており、おそらく營實の名から果実を薬用部位とするものと陶弘景が勘違いした結果と思われる。『名醫別録』では「久服輕身益氣」と記述され、『神農本草經』で上品に収載することも、營實の本来の使用部位は根であることを示唆する。中国医学では陶弘景注は無視されたが、日本ではそのまま受け入れられ、ノイバラの果実の瀉下作用を実験的に知り得て瀉下薬として開発されたと推察される。文献上では1184年の『長生療養方』（釈連基）に營實を沸煮して瀉薬の湯として用いるとあるのがもっとも古い。万葉集のノイバラを詠む歌に瀉下薬として用いるのを彷彿させる歌がある¹⁾。瀉下薬としての本格的な使用は宇佐美主膳が『營實新効方』（1823年）を著して禹功湯などの処方を創製してからであり、この知見が江戸後期の民間医療書である『掌中妙薬奇方』、『妙薬奇覧』、『寒郷良劑』に取り入れられた。

【文献】1)木下武司「万葉植物文化史」（八坂書房、2010年）。